

『社会と倫理』第二十号発刊に寄せて

澤 木 勝 茂

南山大学社会倫理研究所は、このたび研究所紀要『社会と倫理』第二十号を刊行する運びとなりました。社会倫理研究所が南山大学における第三の研究所として設置されてから四半世紀の歳月を経、正確には、創設より二十六年目、「社会倫理研究所」としての活動開始より二十五年目を迎えてその記念号を発行する運びとなりました。

ここで手短に当研究所紀要『社会と倫理』刊行の経緯について述べておきましょう。当研究所発行の紀要は、まず『社会倫理研究所論集 現代社会における技術と倫理』と題し、第一号から第六号まで刊行されました。当時としては時代を先取りする研究方向を打出していたのではないかと自負しております。しかし、書誌名が読者に強い印象を与えないのではないかと反省し、特殊論題を紀要名から外した方が幅広い論題を収録するために適切ではないかという提言を得て、『社会倫理研究』と紀要名を変更して新たに第一号から研究成果の公刊に踏み切りました。その後、より親しみやすい『社会と倫理』という紀要名に再度変更を加え、同時に、「論説」、「時

評論説」、「学界展望」、「倫理学講義」、「社会倫理の基礎」、「書評」などの分類カテゴリーを設け、取り組むべき研究テーマに応じて適宜「特集」を組むなどをして今日に到っております。最近では、懇話会やシンポジウム等の研究所活動の様子を掲載する試みを重ねる等、現代日本の社会と倫理について考察する上で欠かすことのできない重要ジャーナルの一つとなりうるよう毎号の企画・編集に力を入れてまいりました。

このような経緯の下、研究所紀要『社会と倫理』は第二十号刊行を迎えました。私どもと致しましては、「社会倫理研究所」名での活動二十五周年にも当たる今年度を一つの節目の年度と捉え、現在第二種研究所員や非常勤研究員として研究所にかかわりを有しておられる方々に広く寄稿依頼申し上げ、関係スタッフを中心とした記念号を公刊すること致しました。

変貌めまぐるしい現代社会にあつて、問われる社会倫理の問題や課題は次から次へと浮上してまいります。研究所のスタッフも、二〇〇三年以降の新体制が本格的に稼働し始める中、創設以来研

研究所が築いて来た知の蓄積を礎としながら、関係各位の協力を得て研究活動に取り組んでおります。幸いにも本記念号には、さまざまな分野でご活躍中の諸先生方より、多岐にわたるテーマを取り扱った論考をご寄稿いただくことが出来ました。社会倫理に関する原理的な論考から、経済倫理に及ぶもの、歴史的な掘り起こしを試みるもの、現代社会の具体的問題を論ずるもの、方法論を論ずるもので、裾野の広い論説が並ぶ本記念号は、社会倫理研究所が現在取り組んでいる問題の多様性を顕著に示すものと申し上げてよいでしょう。

また、社会倫理研究所は、昨年度からオーストラリアのラトロブ大学と共同で研究プロジェクトを進めるなど、国際的な共同研究への取り組みにも力を入れています。その成果の一例を挙げますと、二〇〇五年九月に四日間に亘って南山大学にて開催されました国際ワークショップ「九・一一事件以降の世界における公平と平和を求めて―日本とオーストラリアのためのオルタナティブを構想して」での議論を受けて新たに書き下ろされた論文集『多国間主義と同盟の狭間―岐路に立つ日本とオーストラリア』が今年九月に刊行されました。その公刊を記念して、同月、シンポジウム「誰のための国際秩序か?―新時代における日本の役割と展望」を開催いたしました。本記念号には、このシンポジウムの模様もまた、特集として収録されております。

また、本記念号では収録できませんでしたが、本紀要の目玉の一つとして毎号お届けしてきた「社会倫理の基礎」コーナーも再び次

号より随時提供してまいりたいと存じます。その他、新しい特集も現在計画中でありますので、どうかご期待下さい。

社会倫理研究所は、社会倫理の観点から今後とも伝統的知と現代的問題をつなぐ場の提供を目指し、活発で有意義な活動を展開してまいりたいと考えております。今後ともご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。発行の辞と致します。